

6



日本
国語
大辞典

きぬ-くるん



日本國語大辭典

第六卷

編集 日本大辭典刊行會

發行 小學館

日本国語大辞典 第六卷

昭和四十八年十一月一日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第一版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相 賀 徹 夫

印刷者 小 林 清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二一三ー一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

きぬ【衣】名 ①衣服、着物。とくに、上半身からお

おつて着るものを総称するという。また、袖(あこめ)か

ずきなどという。*古事記「中・歌謡」「つ松人に

ありせば、太刀佩(たち)けましを、岐怒(キヌ)著せ

ましを」*万葉「一四・三四五三」風の音の速き我妹子

が着せし伎奴(キヌ)たものとくだりまよひきにけり

「東歌」*源氏「帯玉」きぬの首なひ、はらばらとし

て。*更級日記「山の姿の略」色濃ききぬに、白きあ

こめて、夏たじむらに見えぬ。*義経記「二鏡の宿次

が宿に強盗の入る事」鉄漿(かむ)黒に眉細くつくり

て、きぬうちかづき給ひけるを見れば」②動植物

の肉をおおっているもの。動物の羽毛、皮、また植物

の外皮、特に芋の子の皮など。*枕「一五・うつつし

きもの」にはとりのひなの、足高に、しろをかきげ

に、きぬみじかなるまきて、ひよひよかしかがまし

う鳴て。*莊子抄「九」我は蠶のぬけから蛇のまじ

などの如し」③なにもついていない肉体のほだ。

地はだ。*枕「三正月一日は、舎人の顔のきぬにあ

はれ、まことにくろきに、しろき物いきつかぬ所は

雪のむらむら消えのこりたるこちして」④(閉)①

天ぶらのころも。栃馬県安蘇郡野上213②へびのぬ

けがら。新潟県中頸城郡、徳島県祖谷809(開)①

キヌノ(着布)の略(名言通)日本古語大辞典「松岡静

雄」大言海。(2)キヌ(絹)を材とするところから(東

きこと)半臂(はんび)の緒つくるひ、冠(かうぶり)

きぬのくびなど、手もやますつくるひて」(開)①

色名義、易林

きぬ(後)しり。東帯の下製したがさねの裾

(すそ)。また、ころものすそ。裾(きよ)。*十卷本

和名抄「四」裾。陸詞曰「八音居。古呂毛乃須曾一

云岐沼乃之利」衣下也。*観智院本名義抄「裾衣

ノソノ」云キヌノソリ」(開)①和名義、易林

きぬ(脱)く。蛇が脱皮する。*日葡辞書「Quina

(キヌ)ヌグ」ヌグ」蛇が脱皮する。②蛇が脱皮する。和歌山

676 岡山県御津郡74

きぬ【絹】名 ①蚕の繭からとった繊維。②絹糸で

織った織物。絹織物。また、布帛(ふは)は。*万葉

一六・三七九一「我におこせし水懸(みは)はだ。*万葉

(きぬ)の帯を(作者未詳)。*源氏末摘花「黒沼(ふる

き)の皮ならぬきぬ、綾(なだ)綿(わた)、老人(おきな)いびとど

もの着るべきものたぐひ」*法華経音訓「絹」カトリ

キヌ」(開)①(キヌ)衣の義(言元梯)大言海。(2)キ

ルヌノ(着布)の義(日本釈名)柴門和語類集。(3)エ

キヌ(得着)の義(また、キリスフの義(和句解)。(5)カ

ミス(紙ひ)の反(古語記)。(6)絹の字音の転訛

「和訓要」。また、韓の方言から出た語(東雅)。(7)「巾

の字音キ」から(日本語原考)「謝野寛」。(8)「絹の

字音の転とするのは非(大言海)国語の語根とその分

類「大島正健」。(開)①(キヌ)キ。*キヌ

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

【岩手】鳥取キ(岩手)富山伊賀鳥取島原方言

きぬ【ちうわ】うちは【絹】名 絹を張って、絵など

を描いてあるうちわ。*季・夏「一夜(夏)目漱石」黒

髪を肩に流して、丸張りの絹團扇を軽く揺がせば」

(開)①(絹)名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

葉「三」絹裏の肌触(はだ)は(だ)底寒く、起居の忙

きぬ【うら】【絹】名 絹の裏地。*不言(話)尾崎紅

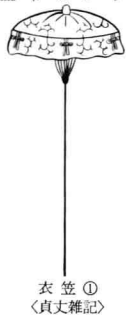
店。*浮世草子・日本永代蔵一五・二西陣の絹織(キヌオリ)屋(俵末先初(うりそめ))

きぬがき【絹垣】名 ①絹のとばり。神祭などの時に、垣のようにめぐらして囲うもの。あやがき。*古事記中「亦其の山の上に、純垣(きぬがき)を張り帷幕を立てて」②「きんがいの絹垣」に同じ。*皇太子行儀式帳「人垣立、衣垣曳、蓋、刺等捧、幸行」
【絹垣キヌガキ】名 ①貴人や高僧等が、着物をかけたという伝説をもつ岩。また、その伝説。
【絹垣】名 ①

きぬかけまつ【衣掛松】名 貴人や高僧等が、着物をかけたという伝説をもつ松。また、その伝説。
【衣掛松】名 ①

きぬがけやま【衣掛山】京都市の市街地の北西方にある衣笠山のこと。宇多法皇が炎天に深雪の風景をながめたいと思い、この山に白絹をかけたため、この異名があるという。絹掛山。衣懸山。*浮世草子「日本永代蔵」一四「絹綿爰に持ちつとひて、さながら衣掛キヌカケ」山を我宿に見し経ぞかし」
【衣掛山】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①絹または織物で張った長柄(ながえ)の傘。昔、天皇、親王、公卿などの貴人が外出する際、背後からさしかさしたるもの。合義解儀制。蓋。*凡蓋、皇太子紫表、蘇芳裏、頂及四角、覆、錦垂、綴、親王紫大綱。一位深緑。三位以上、紺。四位、略、並朱裏。総用、同色。*万葉三・二四〇「ひさかたの天ゆく月を網に刺し我が大王は蓋(きぬがさ)にせり(柿本人麻呂)」*十卷本和名抄「六「華蓋、兼名苑注云華蓋ハ歧加敷、黃帝征蚩尤時帝頭上、有五色雲因其形所造也」*采花「御裳着、宝幢(はたほ)の形、きぬがさ、華鬘などの形にもしたり」②仏像などの上にかざす天蓋。*書紀「欽明一三年一〇月(北野本訓「釈迦仏の金銅の像一軀、幡蓋(キヌカサ)若干」*十卷本和名抄「五「蓋、涅槃經云幡幡蓋ハ岐加敷、有白蓋高座上具也」*今昔三・二「身の色は金色にして、天の童子の如く也。七三の蓋を覆へり」③絹で張った傘や笠。*隨筆「守貞漫稿」二七「安政以來、横濱土民、往々西洋製の鍍銀八骨及び十六骨の絹傘を晴雨に用、稀に有之」*星屋「有鳥武郎」*「緑色の絹笠のかかったランブは、海の底のやうな」
【衣笠】名 ①



笠(雑記) 衣笠(雑記)

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

に三浦氏が本拠とした衣笠城の城跡は、現在の衣笠公園である。
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

きぬがさ【衣笠】名 ①担子菌類スッポントケ科のキノコ。夏から秋に、各地の竹林や庭などの地上に生える。体は高さ一五〜二五センチ、太さ二〜三センチ、頭は鐘状の傘をかぶる。傘の表面にはハチの巣状のくぼみがあり、悪臭のある暗緑色の粘果を満たす。傘の下端から白色レース状のマントをひろげ、裾は径一〇センチ以上、開口。食用になり、中国料理で「竹籠」もしくは珍重する。こむそうだけ。②きのこ「きつねのからかさ(狐傘)」の異名。*書言字考「節用集六「鬼蓋キヌカサタケ」
【衣笠】名 ①

するため、針であけた小さい穴。【閉園】
きぬきぬ【衣(後朝)】**名**。(衣)を重ねた語

①男女が共寝をして、ふたりの衣を重ねてかけて寝たが、翌朝別れる時それぞれ自分の衣を脱いで身につけた、その互いの衣。衣が、ふたりの共寝と、離れ、別れの象徴となっている。*古今恋三・六三七「しのめのほがらほがらとあけゆけばおのがきぬきぬなるぞかなしきよみ人しらず」*宇津保十国譲上「きぬぎぬぬれてわかれししのめも明くる夜ごとにくみびらるる」*源氏浮舟「風の音もひやあらかし霜ふかきあか月にをがきぬぎぬもひやあかになりたる心地して」②男女が共寝して過ごした翌朝、またその朝の別れ。こうちゅう。ごちゅう。*新勅撰・恋三・七九三「後朝の心をきぬぎぬになるときかぬとにもあけゆくほどぞこゑもおししぬ源通親」*連理秘抄「別れに衣々、涙に襦ぬる」*菟玖波集「夏きぬぎぬならぬ暁もなし襦の戸をさぞな水鶏の首づれて」*藤原家隆「*御伽草子・和泉式部」彼女房情深きにより、内にさし入りて、其夜は鴛鴦の衾の下に比翼の契をこめ、夜もやうやうふけ、きぬぎぬなり折しも」*仮名草子「恨の介下「はやくぎぬの袖なれば、互に名残のおもしろくて哀なり」*俳諧・曠野「員外きぬぎぬあまひやほそくありてやかに芭蕉」*艶魔伝「幸田露伴」後朝(キヌギヌ)に未練を引せる睡そうなどけない眼

③男女が別れること。離縁。*狂言記「箕浦」此ごちゅうに、きぬぎぬに成とも、互にあきあかれぬ中ちや程に、近ひ所を通らしますならば、必ず寄らしませ」*俳諧・桃の白夷「尼に成べき背のきぬぎぬ(路通)」④転じて、別々になること。はなればなれになること。*浮世草子・武道伝来記「三四」首と胴とのきぬぎぬさあ只今返事は返事はと」【閉園】キヌギヌ

⑤今更鎌倉(●●●)余(●)⑥
きぬぎぬの恋(こい) 男女が共に夜を過ごした翌朝、別れを惜しむ恋心。歌の題として使われた語。

きぬぎぬの使(つかい) 男が女のところに泊まり帰宅した翌朝、その男からの手紙を女のところに持っていく使。*権記寛弘七年二月二日「宮後朝御使左近少将定頼」*大鏡「二時平「いま一人のみやす所は女上の宰相の女にや、その後朝の使、敦忠中納言、少将にて、し給ひける」

きぬぎぬの別(わか)れ 「きぬぎぬ(衣)②」に同じ。

きぬぎぬばり【氣抜針】**名** 氣抜穴②をあける針。【閉園】
きぬぎぬの拾(あわせ)の類をいう、盗人仲間の隠語。【閉園】
きぬぎぬまど【氣抜窓】**名** 換気、通風のために、地下室などに設けてある窓。換気窓。【閉園】

きぬぎぬ【衣(切)】**名** きぬのきれ。また、絹布または衣服のきれはし。【閉園】キヌギレ

きぬぎぬ【絹櫛】**名** 置き櫛の一つ。*宴曲「拾果集」上・五節末宮の御前の置櫛(おきくし)は、染分扱櫛(そめわけくし)くし、動櫛(ゆるぎくし)、絹櫛にさすむすび櫛(くし)」

きぬぐら【衣配】**名** 年末に正月用の衣服を目下の者に配り与えること。【閉園】
きぬぐら【絹座・絹倉】**名** 絹を売買する所。*宇津保・藤原の君「きぬぐらにある徳町といふ市女の富めるあり。それをめしとりて、北の方にし給ふ」

きぬぐら【絹袋】**名** 絹を含んでいること。また、そのような布や衣服。また、絹物、絹布類。*浮世草子「好色散毒四・二」今にては常に絹袋(キヌケ)を身にまとひ、*浄瑠璃・大経師昔曆中「すらう人の伯父が力には、絹袋(キヌケ)をひっぱらせて腰元奉公に出す事もならぬ」*浮世草子・風流曲「三味線四・一」肌には絹袋(キヌケ)の物を離さず」【閉園】

きぬぐら【氣抜】**名** ①(する) 体から気が抜けてしまったように、ぼんやりすること。また、はりつめた気が抜けて、ぼんやりすること。茫然自失(ぼんぜんじしつ)。きおち。喪心。拍子抜け。*洒落本・雑文穿袋「明白らちあく事、出神(しゅっしん)きぬけ」*滑稽本「浮世床」下「イヤハヤ夏右衛門親子の者もかっかりいたへまして、気(キ)ぬけのやうに成ましてネエ、おたまへさん」*滑稽本「八笑人」四迫加上「おれがせりふのうちだとして、さうぬけがしてゐていけるものか」*煤煙「森田草平」一七「要吉は氣抜けて茫然(ぼんやり)眺めてゐたが」②ビール、サイダーなどの炭酸飲料水や香水などで、その物特有の風味や香りなどの新鮮さがなくなること。また、その物。*情歌大一座野暮鴛編「主のころと安香水の何(どう)も氣抜(キヌケ)のアルコール」③(形動)問抜けなこと。また、その人。あるいは、そのようなさま。ばか。愚鈍。*歌舞伎「傾城の鐘」上「ちとちとちと氣を持って、氣抜(キヌケ)けは人が指さし、仇名を付けて」*和英語林集成(初版)「Kinukena (キヌケナ) ヒト」*当世書生気質(命内道彦一六「たかき(利発)はき)つかぬ田舎男が氣抜(キヌケ)の如きになりたるから」④好調な相場の人が落ちること。【閉園】

きぬげねずみ【絹毛鼠】**名** ネズミ科の哺乳類。体長一四・一九センチ、尾長七・一〇センチ。体毛は柔らかく絹状で、背面は灰褐色、腹部は灰白色。中国北部および東北部、朝鮮の原野や砂漠の周辺にすむ。ちようせんねずみ。【閉園】

きぬくら【絹小倉】**名** 絹紡績糸または縫糸(よりい)を用いて小倉織のように地厚に織った織物。洋服地に用いる。【閉園】

きぬこし【衣被】**名** 着物をへだてること。衣類の上からすること。*古今著聞集八・三二「立ながら、きぬこしにみしといだきて」【閉園】

きぬこし【絹腰】**名** 武士装束の一つ。絹の腰当。*内閣文庫本建武以来追加「貞治六年二月二十九日(中世法制史料集二)追加九〇」同輩、直垂の絹裏、絹腰、并烏帽子懸不可用事」

きぬこし【絹漉】**名** ①(する) 絹ぶる、または絹で物を細かくすること。また、そのこした物。*玄武朱雀・泉鏡花「七御串戯(ごじょうだん)おっしゃりまし。手前のは神田上水を絹漉(キヌゴシ)にいたします」*蓼喰ふ虫(谷崎潤一郎)「この京女が絹こしの肌をいたはる苦心をいちらしくも笑止にも感じたが、斜陽(太宰治)「空気のせめるかしら。陽の光が、まるで東京と違ふぢやないの。光線が絹こしされてゐるみたい」②「きぬこしどうぶつ」絹漉豆(腐)の略。*随筆・守貞漫稿「二八」きぬこしに非るも持運には器中水を蓄へ、浮べて振るる様に携へれば忽ち壊れ損ず」③「絹こし」豆腐のように、できた手どもをいう。大正、昭和に発生流行した語。【閉園】

きぬこし【絹漉】**名** 絹こした、雲丹の卵巣の塩辛。【閉園】
きぬこし【豆腐】**名** 豆乳(とう)にゆるい水につけた大豆をすりつぶして加熱し、布でこした液を漉して、上澄みをとらないで全部を固めてつくった豆腐。ふつうのもめん豆腐にくらべて柔らかく、きめが細かい。あわゆき豆腐。ささのゆき。きぬこし。*朱雀日記「谷崎潤一郎」瓢亭と中村屋、絹漉豆腐をお客の前で切って見せるのが、此の家の名物であったが」【閉園】

きぬこし【絹小町】**名** 「きぬこまちいと絹小町糸」の略。【閉園】

きぬこまちいと【絹小町糸】**名** 絹紡績糸を二本縫(二つ)り合わせた手縫い糸。絹糸の代わりに用いる。絹小町。【閉園】

きぬこもんべり【絹小紋】**名** 絹地に小紋を染め出した畳のへり。【閉園】

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

きぬこころ【絹】**名** 「ゴロフクレン」の略

座と云事は物を売座也。一には絹の座、二に炭の座、三に米の座、四に榎物の座、五に千束積の事也。六に相物座として魚塩の座なり。此座不審なり。紙の座とも云へり。七に馬商座、是七座なり」

きぬさうじ【絹】**名** (サウジは英語) 経(たいていと)に絹糸、線(よこいと)に梳毛糸(そもうし)を用いて、綾織りにした織物。洋服地の一つ。【閉園】

きぬさらき【衣更着】**名** 陰曆二月の称。きさらぎ。*漢書「二月、きさらぎ、きぬさらき共。但、當時は不詠也」*俳諧・本朝文選「一辞類、四季辞、計六「きぬさらき二日の空は、まだ鴨の羽音ながら、日影うららかに」

きぬサラサ【絹】**名** (サラサは英語) 絹地に更紗模様を染め出したもの。羽織裏、襦袢(じゆばん)などに用いる。【閉園】

きぬざる【絹袋】**名** キヌザル科の哺乳類。体長約二〇センチ、尾長約三〇センチ。尾は長く有毛だが物に巻き付かず、指の爪は鉤爪(かぎづめ)状で、親指の対向性がない。耳は長い、白毛の毛房にかくされる。体毛は絹糸状で尾には黒と灰色の横縞があり、背の毛色は、一本が基部から黒、黒、灰色の順に分かれる。樹上で小群をつくって生活し、果実、昆虫などを食べる。ペトリス、ボリビア、コロンビアの熱帯雨林にすむ。ペトリスでは飼育される。ポケットザル。マーモセット。【閉園】

きぬざわり【ざわり】**名** 絹物にさわった感じ。*虞美人草「夏目漱石」二「絹障(キヌザハリ)のしなやかに、布団が擦られて、隠したものが出掛ったのかも知れぬ」【閉園】

きぬじ【絹地】**名** ①絹織物の地。絹で織った布。絹布。*御湯殿上日記「長享元年八月五日「御きぬぢをあをのからし。地上のところはかすりすし」②日本画を描くのに用いる平絹。絵絹。*安愚楽鍋(仮名垣魯文「初「明日は大藩の知事公から召されてお席に於て絹地(キヌヂ)三幅対の山水を即席にしたためなければならぬから」*草枕「夏目漱石」八「絹地ではないが、多少の時代がついて居るから、字の巧拙に論なく、紙の色が周囲のきれ地とよく調和して見える」③色紙などに張った絹布。【閉園】

きぬじら【絹織】**名** 経緯(たてよこ)に練絹糸を用いて、じらの織り方を応用した絹織物。絹織物にしじら織り(じら織)を応用したもの。

きぬしぼり【絹絞】**名** 絞りに染めを施してある絹織物。長襦袢(ながじゆばん)、帯揚げ、半襟(はんえり)、手柄(てがら)等を用いる。*風流伝「幸田露伴」四・下「絹絞の半掛(はんかけ)一つたりとも空(あだ)に恵む事難し」【閉園】

きぬじょうふ【シャフ】**名** 薄く織った絹織物。透綾(すきや)。【閉園】

きぬじょうふ【シャフ】**名** 薄く織った絹織物。透綾(すきや)。【閉園】

絹と羊毛の交織のフランネル。【図】

きぬぶるい：ぶるひ【絹飾】底に絹の布をはった

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬほうせきと：パッセイと【絹紡績糸】絹の

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬぼりし【絹帽子】英名は Silk Hat の訳語

きぬめつき【絹鍍金】木綿、麻などの植物性の織

きぬめんこうしよもの：カウショクモノ【絹綿交織物】

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬもじ【もじ】は、麻糸で目を粗く織った布

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱

きぬも【衣箱】衣箱は丈の長いスカート状の下の衣箱



衣箱

て向うより出て来る。*楽屋図会拾遺下【絹省】キヌ

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木

きぬやなぎ【絹柳】ヤナギ科の落葉小高木



輪

のに用いる木製の道具。中細、打杵など数種ある。

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享

きね【杵】昌与反訓岐嗣。*享



丸に一つ杵



違ひ杵

たるに同じ。*洒落本・魂胆勘定上「禿はおもひがけなくつめられ、あの客もせん度くれずと頃日(このころ)くればよいに、野暮めがなど、人のしりたるやうに、きね棒(ボウ)にあたるは遊里の風なり」

きね【木根】(名) ①樹木の根。*改正増補和英語林集成「Kine キネ 木根(訳)木の根」②(「ね」は接尾語)木。樹木。*延喜式・祝詞「祈年祭陸(く)がより往く道は、荷の緒繩(ゆ)ひ堅めて、磐(いは)ね木根(きね)履(ふ)みさくみて」*倭姫命世記「魚井原の木根(きね)掃(は)り石小石造平て」

きね【巫目】(名) 神に仕える人。神楽(かぐら)を奏し、祝詞(のりと)をあげて神意をうかがい、それを人々に伝える、神と人間とのなだちをする人。神官、巫女(みこ)いずれにもいう。*神楽歌採物・神「全宗霜八度やたび置けど枯れせぬ柳葉の立ち栄ゆべき神の支綱(きね)さかも」*海道記「逆川より鎌倉、されども神慮は人知るべからず。宜禰(きね)ならはしに随て、ふし拝みて通りぬ」*太平記・九・高氏被籠願書於篠村八幡宮事、焼荒(たきすさ)みたる燎(にはび)の影の風(ほのか)なるに、宜禰(きね)が袖振る鈴の音幽(かすか)に聞えて神さびたり」
①ネギメ(禰宜女)の略か(俗語考)。②ネギメ(禰宜女)の略か(神楽歌者・類聚名物考)。③「祈念」の音から「言元集」と訓(カ)。(4)神楽歌にある幾福は木根の意(古今集遠鏡)。(5)カミノメ(神女の反名語記)。
きね【名】植物「きょうおう(薑黄)」の異名。*薬品手引草「薑黄(きょうおう)宝鼎(ほうてい)きね唐菜(かうさい)こんのるい也」

きね【鬼念】(名) (「ね」は「ねん(念)」の略) ①鬼のよねに無念悲な心。悪心。また、その人。②偏屈で無粋な人。物事に練れていない人。やば。無粋。遊里に始まり文政・天保(一八一八—一八四四)ごろ上方に流行した語。*洒落本・箱まくら下「またはらの悪いの、またはぶすいじやのといふ事を、鬼念(きね)ともいふ」*新撰大阪詞大全「きねとは、物に練ぬ人」③立腹するをいう、花柳界の語。*洒落本・短華薬「エラきねでんちへ往(い)くと言(こと)意(い)かし」

きね【語素】下に名詞を伴って古いの意を表わす。「鬼念(きね)キネオオス」とは腹をたてること也。はらのたつときは鬼の心のやうになるゆへ也」

きね【掃寧】(名) (寧)は安んじるの意) ①嫁入した女性が、里帰りをすること。転じて、親と離れて生活している女性が、親元に短期間もどることにともなう。帰省。*三国伝記一〇・四「吾汝を産て後、中

には女御后とも成て吾を掃寧せよかしと思し」*東京新繁昌記(服部誠)「初貸座舖」又樓主の娼妓を御する牛馬の如く、雖も掃寧せしめず」*改正増補和英語林集成「フボニ Kineisanu(キネイスル)」*詩経・周南・葛覃「書書害雪、掃寧父母」②女性が離婚されて実家へ帰ること。離別されること。破鏡。*曹植「棄婦詩」附心長歎息、無子当掃寧」③男性が故郷に帰って父母の安否を問うこと。*陸機「思婦賦」冀「王事之暇子、庶掃寧安有時」④諸侯が都の天子に謁見し、帰って人民を安心させること。*儀礼「覲礼」天子許於侯氏曰、伯父無事、掃寧乃国」

⑤家に帰って喪事を行なうこと。
きね【えい】(名) 長唄三味線方の家名。杵屋の一派。四代目杵屋彌七、本名赤星よ子が昭和五年(一九三〇)頃、杵屋を改めて名のつた家名で、赤坂に杵家彌七女塾を創立し、三味線文化譜を考案して長唄以外の曲も演奏、教授した。
きね【た】(杵歌) (名) 殺物や餅などをつく時、杵の動きの調子をとるためにうたう労働歌。きうた。*文明本節用集「隣有喪春不相(ウズツクトキニキネウタウタハズ)、里有殯不巷歌(礼記)」*狂歌「吾吟我集一序、味噌つくもきねうたはうらたひける」*俳諧「新しなし栗上(杵歌)キネウらや御おほん衣の子よ瘦(かじ)物少(物)いしつら波の為をたさがる(車歌)」
きね【オラマ】(名) (音読 Kineoroma「キネマ」と「パノラマ」の合成語) パノラマの点景や背景に色彩、光線をあてて景色をいろいろに変化させて見せる装置。明治末期から大正にかけての興行物の一つ。東京浅草にあった劇場「三友館」はその常設館であった。キネオラマをやる二友館(にいうかん)てのが有るだらう?」*桐の花「北原白秋」白猫「ただ不可思議な恍惚と濃厚な幻想とが恰度水底のキネオラマのやうに現出する」
きね【た】(な) (名) (杵形中差) (名) 女性の髪飾りの一つ。髻(こ)どりの中央にさして飾りとするもので、手杵(中細杵)の形を、一端をはずして差した後、に、そのはずした端をはめる。江戸時代、安政(一八五四—一八六〇)初年頃流行し、象牙や詩絵をあしらった高価なものも作られるようになった。

きね【かつ】(杵勝) (名) 長唄三味線方杵屋の一派で、勝の字を名のるもの。勝流ともいう。杵屋勝五郎を祖とし、二世勝三郎の代に派え、今も勝三郎を襲名する。力強い撥(はち)さばきが特徴。
きね【そ】(名) (因) 因太くかいた人、兵庫県赤穂郡矢野63 徳島県86

キネスコープ (英 Kinescope) アメリカ RCA社製作のテレビ受像用ブラウン管の商品名。一般名として

も用いられる。
きね【ずみ】(木鼠) (名) ①「りす(栗鼠)」の異名。*倭語類解「木鼠下」
②「りす」の異名。*若菜集「島崎藤村」松島瑞瑞寺に遊び葡萄栗鼠の木影を観て「はられて薄き葡萄葉の影にかくする栗鼠(キネズミ)」
③「暗夜行路志賀直哉」四・一七「恐らく野鼠(木鼠)キネズミの仕業だらう」
④「リス」のように身軽で、木組の上ですばやく動きまわるところから) 大工のことをいう、盗人仲間(盗)の隠語。「特殊語百科辞典」
⑤「屋根伝」忍びこむ泥棒のこと、盗人仲間(盗)の隠語。「特殊語百科辞典」
⑥「鳥(こ)じゅうから(五十音)」の異名。*木朝倉鑑六「木鼠鳥訓」幾爾須美キネズミ(一)集解「状如雀而頭背鬣上灰青色眼後黒而頰頰及腹純白腹下黄赤色翅黒尾灰青交、黒其声短而微頻、山中樹穴而居故曰木鼠、其味不佳」
⑦「因」す(栗鼠)。青森県上北郡17 岩手県九戸郡12 仙台16 山形県飽海郡06 福島県13 群馬県吾妻郡06 埼玉県秩父24 神奈川県津久井郡・新潟県中浦原郡・長野県・静岡県06 奈良県吉野郡04
きね【ぞう】(名) (男根を表わす杵を人名になぞらえた語) 好色な男をいう。咄本「軽口露がはなし四・一二」して立像か座像か」と問ければ「杵蔵が坊主落」
きね【おどり】(名) 好色な男を表現した踊り。*浮世草子「色道大鼓」一、「鉦をたたくは念仏おどり、ひんとはねたが題目おどり、きね蔵おどりは合点か、居合おどりやいせおどり」*浮世草子「人倫糸屑」妄狂おおくの女を丸裸になした相撲の興行、男出てたしして杵蔵(キネザウ)おどり」
きね【たち】(木根立) (名) 樹木の切り株、樹木を切り倒した後の根株。
きね【たま】(杵弾) (名) 昔の鉄砲に使用した弾丸の一種。手杵(中細杵)の形をしているところからいう。
きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」
きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」

きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」

きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」

きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」

きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」

きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」

キネトスコープ (英 Kinescope) エジソンが発明した初期の映写機。約四〇フィートのフィルムを一秒四コマの速度で約三〇秒間回転させ、のぞきめがね式の装置で見る。
キネトフォン (英 Kinetophone) 世界最初の発声映写機。一九一二年、エジソンが発明したもので、トイキーの先駆となった。*現代語辞典(伊林秀春)「キネトフォン Kinetophone(英)活動写真と蓄音機とを一つの機械に仕組んだもの、発声活動写真」

キネマ (英 Kinetographの略) ①映画。シネマ。*先生への通信(寺田寅彦)「伯林から二、斯ういふ処にはお極りのキネマが自働ピアノを客を呼んで居ました」*星を造る人(稲垣足穂)「キネマのフィルムが切断したように、河童(かま)芥川龍之介(一)「キネマか何かを見に行つてしまひました」②映画館。劇場名として「〇〇キネマ」の形で多く用いられた。*生きたる兵隊(石川達三)「一〇軒を並べたカフエ、喫茶店、キネマ、酒場、おでん屋のあたりを将校と兵とが群がりさわいでゐた」*私の東京地図(佐多稲子)「道二、三戸家キネマも改修して戸塚東宝に変わった」

きね【ま】(名) 古い米。古米。*改正増補和英語林集成「Kine キネ 略 Kine-mat: キネマ」(訳)古い米」
きね【またき】(杵踏) (名) 婚礼習俗の一つ。花嫁が生家を出るとき、あるいは嫁家に入るとき、杵をまたぐ呪的行事で、秋田県や埼玉県に見られる。
キネマトグラフ (英 Kinetograph) 活動写真。映画。のちに、キネマと略称するようになった。シネマ。*ふらんす物語(永井荷風)「ひとり旅」活動写真(キネマトグラフ)の広告隊が」
キネマニュース (英 Kine news) 大正一三年(一九二四)以来、大阪毎日新聞が毎月二回公開したニュース映画の名称。また、ニュース映画の古称。
[現代語辞典(伊林秀春)]

きね【むすび】(杵結) (名) 女性の髪の結い方の一つ。まげを杵の形に似せた結い方。*滑稽本「指面草」大福箱の縫に益(こ)ほれかか梅花の結より、杵結(キネマ)より稲城(いなぎ)結、手柄(て)より忍(しの)が似合(あ)は、島田(しま)とはちあつてきたと洒落(うち)も」

きね【や】(杵屋・稲音家) (名) (杵屋) 長唄三味線方の屋号の一つ。元禄年間(一六八八—一七〇四)初世杵屋勘五郎が上方から江戸にくだって江戸長唄を開いた(杵屋系譜)といわれるが確証はない。六左衛門に代表される宗家の植木店(うききた)な派の他、佐吉家、六三郎家、正次郎家など多くの分派があり、*洒落本「虚誕伝」(大さ)「長、長計になり、女筆指南は、杵屋(キネヤ)にまさされ、*難俳(柳多留)四六「きねやとはつくのではなしひくの也」*人情本「春色辰巳園四・七条」哀れ催す折もをり、何所の宅か知らねども、杵(キネ)や何某が名取の妙音、古き唱

も用いられる。
きね【ずみ】(木鼠) (名) ①「りす(栗鼠)」の異名。*倭語類解「木鼠下」
②「りす」の異名。*若菜集「島崎藤村」松島瑞瑞寺に遊び葡萄栗鼠の木影を観て「はられて薄き葡萄葉の影にかくする栗鼠(キネズミ)」
③「暗夜行路志賀直哉」四・一七「恐らく野鼠(木鼠)キネズミの仕業だらう」
④「リス」のように身軽で、木組の上ですばやく動きまわるところから) 大工のことをいう、盗人仲間(盗)の隠語。「特殊語百科辞典」
⑤「屋根伝」忍びこむ泥棒のこと、盗人仲間(盗)の隠語。「特殊語百科辞典」
⑥「鳥(こ)じゅうから(五十音)」の異名。*木朝倉鑑六「木鼠鳥訓」幾爾須美キネズミ(一)集解「状如雀而頭背鬣上灰青色眼後黒而頰頰及腹純白腹下黄赤色翅黒尾灰青交、黒其声短而微頻、山中樹穴而居故曰木鼠、其味不佳」
⑦「因」す(栗鼠)。青森県上北郡17 岩手県九戸郡12 仙台16 山形県飽海郡06 福島県13 群馬県吾妻郡06 埼玉県秩父24 神奈川県津久井郡・新潟県中浦原郡・長野県・静岡県06 奈良県吉野郡04
きね【ぞう】(名) (男根を表わす杵を人名になぞらえた語) 好色な男をいう。咄本「軽口露がはなし四・一二」して立像か座像か」と問ければ「杵蔵が坊主落」
きね【おどり】(名) 好色な男を表現した踊り。*浮世草子「色道大鼓」一、「鉦をたたくは念仏おどり、ひんとはねたが題目おどり、きね蔵おどりは合点か、居合おどりやいせおどり」*浮世草子「人倫糸屑」妄狂おおくの女を丸裸になした相撲の興行、男出てたしして杵蔵(キネザウ)おどり」
きね【たち】(木根立) (名) 樹木の切り株、樹木を切り倒した後の根株。
きね【たま】(杵弾) (名) 昔の鉄砲に使用した弾丸の一種。手杵(中細杵)の形をしているところからいう。
きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」
きね【ち】(名) 古い茶。*改正増補和英語林集成「Kinecha キネチャ」

ねまつり。きのえま。きのえ。きのえね。●随筆・嬉遊笑覧七甲子待何待といふことはすべて其時になる迄眠らざるをいふ。〔園圃論〕

きのえねまつり【甲子祭】『名』「きのえねま」(甲子待)に同じ。●波形本狂言・大黒連歌「いつもきのへ子祭り」をいす。〔園圃論〕

きのえねめし【甲子飯】『名』甲子待に、炊いて供える黒大豆入りの茶飯。●夜明け前島崎藤村第二部下・二〇・四「浅草の方に甲子飯(キノエネメン)の小料理屋を出してゐるとのことである」〔園圃論〕

きのえねや【甲子屋】江戸浅草郊外の真崎稲荷境内にあった田楽料理屋。●洒落本・百安楚楚「真向島のにぎわむ、あまたある茶屋の中にも、田楽はきのえ子屋(ネヤ)に名高(なかく)。●随筆・蜘蛛の糸料理茶屋「天明に磯せりの通人が遊ぶ料理茶屋、葛西太郎・大黒屋孫四郎、(割註)同所秋葉、甲子屋(真崎)」。〔園圃論〕

きのえま【甲子待】『名』「きのえま」(甲子待)に同じ。●俳諧韻藻「元禄壬申冬一〇月三日・許六亭興行「夜着たたま置長持の上(俗水) 灯の影めづらしき甲子待(色巻)」。〔園圃論〕

きのえ【か】は【紀ノ川】奈良県南部の大台ヶ原山に発し、和歌山県北部を西流して、和歌山市で紀伊水道に注ぐ川。上流は吉野川と呼ばれる。古くから高野山への貢米輸送や橋本の塩市への塩の輸送、それに吉野材のいかだ流しなど、水運に利用された。下流域に和歌山平野を形成する。木の川。●夫木四「春たけりてきのかはしるくなりぬめりよし」のうくに花や散らん(平泰時)。〔園圃論〕

きのかわ【か】は【木皮】『名』ヤガ科のガ。体長一八・二(ミリ)はねの開張四〇(ミリ)以内。体はねともに灰緑褐色、うしろはねと腹部は暗褐色で、はねの内側が淡い。前ばねには多数の起立した鱗粉が盛り上がり、夏に羽化し、成虫は越冬する。濃黄色で褐色条紋のあるボート形の繭をつくる。各地に分布。〔園圃論〕

きのかわ【せ】は【木皮】『名』木皮草履(名)「概(つき)の木の皮を草履の形に作って二重にかさね、それに緒をすげたはき物。秋田付近で用いられた。●随筆・雪の降道「上」木皮(うら)は、根の木の皮をさながらさうりてのさまにつくりて二重かさねつ、それ緒をかけた作るやうにせしなり」

きのく【に】は【紀ノ川】(和歌山)と、三重県の一部)の古称。「伊」を添えて「紀伊国」となった。●古事記中「紀国(きのくに)の男之水門(をのみなと)に到りて詔りたまひしく。●和訓栞「きい 紀伊はもと木国と書たるを、和銅年間に好字を撰み、二字を用ひさせられしりやく書也。伊は紀の音の響なり」

きのくに【が】は【紀ノ川】(和歌山)と、三重県の一部)の古称。「伊」を添えて「紀伊国」となった。●古事記中「紀国(きのくに)の男之水門(をのみなと)に到りて詔りたまひしく。●和訓栞「きい 紀伊はもと木国と書たるを、和銅年間に好字を撰み、二字を用ひさせられしりやく書也。伊は紀の音の響なり」

と、三重県の一部)から産出する染め皮。素襖(すお)のひもに用いる。●宗五大草紙衣装の事「すはうひもかはの事、黒梅小紋の付たる紀伊国革可、然由候」。〔園圃論〕

きのくに【ご】は【紀ノ川】(和歌山)と、三重県の一部)から産出する漆塗りの食器、特に朱塗りの椀(わん)をいう。根来、黒江はその名産地として有名であった。紀国産。●浮世草子「世間御算用一・二・三・名だばし、ぬりばし、紀伊国五器(キノくに)ごき、鍋ぶた迄さりと新しく仕替て」。〔園圃論〕

きのくに【み】は【紀ノ川】(和歌山)と、三重県の一部)から産出するミカン。紀州蜜柑。〔園圃論〕

きのくに【も】は【紀ノ川】(和歌山)と、三重県の一部)から産出する木綿。地が薄手で織り糸が細い。●版本草子「仁勢物語下・七八「家見の始めに、ただ何をか参らすべき。三条の大路(おほぢ)に、紀の国もめん有りけり。いと面白き筋たて交(ま)ぜり。●万金産業袋「五」紀の国もめん、地うす口、いと細(ほそき)也」。〔園圃論〕

きのくに【や】は【紀ノ川】(和歌山)と、三重県の一部)から産出するミカン。紀州蜜柑。〔園圃論〕

きのくに【わ】は【紀ノ川】(和歌山)と、三重県の一部)から産出する漆塗りの椀。紀国五器。●浮世草子「立身大福帳七」きの国わんの内、かしはや源之丞たつばねといふて、一匁のわんにかたきわんあり」。〔園圃論〕

きのくに【ら】は【木の子】(木の意) 大型の菌類の俗称、傘状をなすものが多く、山野の樹の陰や朽木などに生じる。食用となるものと有毒なものがある。くさびら。●和玉篇「菌、キノコ、クサヒラ」。●後頭屋本節用集「菌、キノコ」。●日葡辞書「Qino、(キノ)」。●辞書「きのこ」。●シモの語「(菌)の鶏」とさか。青森県田子の義(和訓栞「あめく」琉球語「菌」(木の子)の義)と和訓栞「紫門和語集・大言海」たべもの語源抄「坂部甲次郎」。(2)キノコ(気之疑)の義(日本語原学「林斐臣」)。(3)キノコ(男根の義)但言集「義(日本語原学「林斐臣」)。(3)キノコ(男根の義)但言集「義(日本語原学「林斐臣」)。(3)キノコ(男根の義)但言集」

きのくに【せ】は【木皮】『名』木皮草履(名)「概(つき)の木の皮を草履の形に作って二重にかさね、それに緒をすげたはき物。秋田付近で用いられた。●随筆・雪の降道「上」木皮(うら)は、根の木の皮をさながらさうりてのさまにつくりて二重かさねつ、それ緒をかけた作るやうにせしなり」

きのこ【が】は【菌】(名) 山林に入つて、きのこを捜してとること。たけ狩り。きのこ取り。●季・秋・俳諧・続三寄詠「榮焚(たい)て陣取したり菌狩(きのこがり)」。●俳諧・白雄句集「三三味線に松のかつらや菌狩」。〔園圃論〕

きのこ【ち】は【菌】(名) 山林に入つて、きのこを捜してとること。たけ狩り。きのこ取り。●季・秋・俳諧・続三寄詠「榮焚(たい)て陣取したり菌狩(きのこがり)」。●俳諧・白雄句集「三三味線に松のかつらや菌狩」。〔園圃論〕

きのこ【め】は【菌】(名) 松たけ、初たけ、松露(しょうろ)などのきのこ類をさきみ入れてたいた飯。●季・秋・花水「白野草城」秋きのこ飯ほこほことして盛られたる。〔園圃論〕

きのこ【や】は【菌】(名) きのこ類が多く自生する山。●俳諧「百番句合」六九番「里近く社引けたり菌山きのこやま(宗瑞)」。●俳諧「白雄句集」三「なつかしや楓苗ふくきのこ山」。●俳諧「文政句帖」五年八月「先達の手首尾わきのさや茸山(きのこやま)」。〔園圃論〕

きのこ【お】は【菌】(名) きのこ類が多く自生する山。●俳諧「百番句合」六九番「里近く社引けたり菌山きのこやま(宗瑞)」。●俳諧「白雄句集」三「なつかしや楓苗ふくきのこ山」。●俳諧「文政句帖」五年八月「先達の手首尾わきのさや茸山(きのこやま)」。〔園圃論〕

きのこ【じ】は【菌】(名) きのこ類が多く自生する山。●俳諧「百番句合」六九番「里近く社引けたり菌山きのこやま(宗瑞)」。●俳諧「白雄句集」三「なつかしや楓苗ふくきのこ山」。●俳諧「文政句帖」五年八月「先達の手首尾わきのさや茸山(きのこやま)」。〔園圃論〕

きのこ【の】は【菌】(名) きのこ類が多く自生する山。●俳諧「百番句合」六九番「里近く社引けたり菌山きのこやま(宗瑞)」。●俳諧「白雄句集」三「なつかしや楓苗ふくきのこ山」。●俳諧「文政句帖」五年八月「先達の手首尾わきのさや茸山(きのこやま)」。〔園圃論〕

きのこ【が】は【菌】(名) 山林に入つて、きのこを捜してとること。たけ狩り。きのこ取り。●季・秋・俳諧・続三寄詠「榮焚(たい)て陣取したり菌狩(きのこがり)」。●俳諧・白雄句集「三三味線に松のかつらや菌狩」。〔園圃論〕

を織り出した餅(かすり)。また、その模様の染め餅。●大道無門「里見尊白夜」二「きの字餅(シガスリ)のお召の二重は、仕立即らしかつたけれど」。きのこ【し】は【菌】(名) 山林に入つて、きのこを捜してとること。たけ狩り。きのこ取り。●季・秋・俳諧・続三寄詠「榮焚(たい)て陣取したり菌狩(きのこがり)」。●俳諧・白雄句集「三三味線に松のかつらや菌狩」。〔園圃論〕

きのこ【た】は【菌】(名) 山林に入つて、きのこを捜してとること。たけ狩り。きのこ取り。●季・秋・俳諧・続三寄詠「榮焚(たい)て陣取したり菌狩(きのこがり)」。●俳諧・白雄句集「三三味線に松のかつらや菌狩」。〔園圃論〕

きのこ【か】は【菌】(名) 山林に入つて、きのこを捜してとること。たけ狩り。きのこ取り。●季・秋・俳諧・続三寄詠「榮焚(たい)て陣取したり菌狩(きのこがり)」。●俳諧・白雄句集「三三味線に松のかつらや菌狩」。〔園圃論〕

きのこ【の】は【菌】(名) きのこ類が多く自生する山。●俳諧「百番句合」六九番「里近く社引けたり菌山きのこやま(宗瑞)」。●俳諧「白雄句集」三「なつかしや楓苗ふくきのこ山」。●俳諧「文政句帖」五年八月「先達の手首尾わきのさや茸山(きのこやま)」。〔園圃論〕

きのこ【ら】は【菌】(名) きのこ類が多く自生する山。●俳諧「百番句合」六九番「里近く社引けたり菌山きのこやま(宗瑞)」。●俳諧「白雄句集」三「なつかしや楓苗ふくきのこ山」。●俳諧「文政句帖」五年八月「先達の手首尾わきのさや茸山(きのこやま)」。〔園圃論〕

きのこ【わ】は【菌】(名) きのこ類が多く自生する山。●俳諧「百番句合」六九番「里近く社引けたり菌山きのこやま(宗瑞)」。●俳諧「白雄句集」三「なつかしや楓苗ふくきのこ山」。●俳諧「文政句帖」五年八月「先達の手首尾わきのさや茸山(きのこやま)」。〔園圃論〕

きのこ【せ】は【木皮】『名』木皮草履(名)「概(つき)の木の皮を草履の形に作って二重にかさね、それに緒をすげたはき物。秋田付近で用いられた。●随筆・雪の降道「上」木皮(うら)は、根の木の皮をさながらさうりてのさまにつくりて二重かさねつ、それ緒をかけた作るやうにせしなり」

きのこ【が】は【菌】(名) 山林に入つて、きのこを捜してとること。たけ狩り。きのこ取り。●季・秋・俳諧・続三寄詠「榮焚(たい)て陣取したり菌狩(きのこがり)」。●俳諧・白雄句集「三三味線に松のかつらや菌狩」。〔園圃論〕

